

第Ⅲ章 高校生のアルバイト観



はじめに

前章では高校生のアルバイトの実態を、かなりくわしく紹介した。6割を軽くこえる者(65.4%)が高校2年生の夏までに、なんらかのアルバイトを経験している。そして、現在もアルバイトを続けている者は29.6%と3割に近い。

彼らの時給、働く日数、時間、それから職種はさまざまである。それだけにアルバイトができるチャンスは多い。だからであろうか、高校生が得る1か月のアルバイト収入額は、

ちらばりが大きい(表Ⅲ-1)。

1か月の収入が「1万円以下」という者は1割弱いる。2万円台、3万円台、それに4万円台がそれぞれほぼ2割前後いる。また、「6万円以上」稼いでいる者も12.0%と1割をこえる。

本章は高校生にとってアルバイトのもつ意味は、この1か月の収入額に象徴的にみられるように異なっているのか、それともある程度同じであるのか、確かめる。

表III-1 1か月のアルバイト収入額

(%)

	全 体	男 子	女 子
10,000円以下	9.0	8.8 <	9.2
10,001~20,000円	19.4	15.0 <	23.3
20,001~30,000円	19.9	13.5 <	25.2
30,001~40,000円	17.6	16.7 <	18.0
40,001~50,000円	15.4	18.0 >	13.2
50,001~60,000円	6.7	8.7 >	5.2
60,001~80,000円	6.1	10.1 >	2.3
80,001円以上	5.9	9.2 >	3.6

1. アルバイト高校生はリッチな消費者——

消費者の動向に敏感なデパートがヤング専用のフロアを設けてから、ほぼ20年がたつ。今や消費の王様は、ヤングと幼児といわれる。彼らは、消費社会の寵児なのである。

ヤングの一人である高校生のフトコロ具合はどうであろうか。

1か月に親から小遣いをどのくらいもらっているのでしょうか。表III-2の「全体」をみると、「4,000~5,999円」がいちばん多い。ほぼ4割近くいる。

小学生の高学年の平均が1,500~2,000円、中学生が3,000円ほどであるから、高校2年生が5,000円ぐらいというのも、それほど多いとはいえない。

この表が興味深いのは、親から小遣いをもらっているのは、アルバイトをしていない生徒に多い、ということである。そして、アルバイトをしている者は、もらう額が「決まっていない」ということである。定期的には小遣いをもらっていない。

アルバイトをしている者は、小遣いぐらい自分で稼ぐという気持ち強いのか、あるいは親のほうがアルバイトをしているから小遣い額を減らしているのか、金銭面で親への依存が少ない。

といって、アルバイトをしている者のフトコロが寂しいとは決まっていない(表III-3)。高校2年生の財布の中には、1,000円ないし2,000円ほど入っている。

下校時に雑誌を買い、ファーストフードで軽い食事をしたとしても1,000円をこえないだろうから、それほど大金を持ち歩く必要はなからう。

財布の中に1,000~2,000円を持っているのはあくまで平均像である。アルバイトの経験別にみると、異なった姿が浮かびあがってくる。

男女とも、今アルバイトをしている者ほど財布の中味はふくらんでいる。例えばアルバイトをしている男子の中で「4,000~5,000円」持っている者は2割弱。「1万円以上」持

っている者は1割ほどいる。

アルバイトをしている者は、親からもらっている小遣いは少ないものの、自分で稼ぐためか、けっこう大金を持ち歩いている。

また、高校生は財布の中に入れているのは現金だけとは限らない。キャッシュカードも入っているかもしれない。それを調べたのが表Ⅲ-4である。

高校生はクレジットカードは使わないが、キャッシュカードは意外と使っている。「よく使う」者は1割をこえる。それに「ときどき使う」を加えると3割近い者が、キャッシュカードを使用している。

そして、キャッシュカードを使用するのはやはりアルバイトをしている者たちである(表

Ⅲ-5)。男女とも、今アルバイトをしている者の半数は、キャッシュカードを使用している。また、キャッシュカードの持ち率は7割前後である。1度アルバイトを経験した者は、今アルバイトをしている者ほどではないが、やはりキャッシュカードの持ち率と使用率も高い(持ち率は半数、使用率は4人に1人の割合)。

アルバイトをするとまとまった金額ができるせいか、高校生でもキャッシュカードをつくり、しかも実際それを使っている。千葉大生の7割はキャッシュカードを持っているが、今アルバイトしている高校生は、ほぼ大学生の持ち率と同じである(『千葉大生白書'89』)。

表Ⅲ-2 1か月の小遣い(親からもらう)

(%)

	全 体	アルバイト している	していない	男 子	女 子
1,999円以下	2.2	4.6	> 1.2	2.5	2.0
2,000~3,999円	9.2	8.2	> 7.4	7.6	< 10.7
4,000~5,999円	(36.7)	30.5	< (38.0)	35.2	< 38.1
6,000~7,999円	11.6	9.2	< (13.2)	12.7	> 10.6
8,000~9,999円	3.9	2.9	4.4	4.1	3.6
10,000~12,999円	9.5	8.2	< (11.5)	9.5	9.5
13,000~14,999円	0.8	0.6	0.9	1.0	0.7
15,000円以上	3.0	2.6	< 3.3	(4.5)	> 1.5
決まっていない	23.1	(33.2)	> 20.1	22.9	23.3

表III-3 財布に何円入っているか (アルバイト経験別)

(%)

		1,000円 以下	1,001~ 2,000円	2,001~ 3,000円	3,001~ 4,000円	4,001~ 5,000円	5,001~ 9,000円	10,000円 以上
		31.2	29.2	18.2	2.1	11.7	2.1	5.5
男 子	アルバイト 中	30.5	21.5	15.2	1.7	17.7	3.1	10.3
	△		△					
	アルバイト 経験あり	32.5	31.1	16.8	2.4	10.6	1.8	4.8
	△		△					
女 子	アルバイト 中	26.5	29.2	21.6	1.6	14.9	1.0	5.2
	△		▽					
	アルバイト 経験あり	32.1	29.9	20.2	1.8	10.4	1.0	4.6
	△		▽					
	アルバイト 経験なし	34.7	33.2	17.7	1.7	9.2	1.4	2.1

表III-4 持っているもの

(%)

	よく使う	ときどき使う	持っているが 使わない	持っていない
キャッシュカード	11.4	18.3	16.8	53.5
クレジットカード	0.9	1.3	4.6	93.2

表III-5 キャッシュカードの使用

(%)

		よく使う	ときどき使う	持っているが 使わない	持っていない
男 子	アルバイト中	21.2	27.7	16.2	34.9
		(48.9)			
	アルバイト経験あり	8.5	16.4	18.2	56.9
		24.9			
	アルバイト経験なし	3.0	8.0	14.1	74.9
		11.0			
女 子	アルバイト中	23.8	30.3	17.4	28.5
		(54.1)			
	アルバイト経験あり	10.4	21.0	18.5	50.1
		31.4			
	アルバイト経験なし	2.7	9.7	15.9	71.7
		12.4			

2. アルバイトをする理由と効用

それでは高校生は、アルバイトをどんな理由から始めるのであろうか。それを調べたのが、表III-6である。

興味深い結果がでている。上位にくるのは次の2つである。

- 1位……「友達づきあいやオシャレをするお金を得るため」(63.8%)
- 2位……「高価なものを買うため」(58.2%)

「将来の職業に役立つ」(9.2%)や「社会勉強のため」(15.1%)という功利的な理由からアルバイトをしている者は、わずかである。

また、「生活費や学費のため」からアルバイトをすると答えた者が4人に1人いる。意外と高い数値である。しかし、この者たちの「生活費や学費のため」は、ふた昔前ほどの苦学生とは異なる。高校生にとっての生活費とは、食費や住居費は含まれない。この生活費とは、おやつや清涼飲料水、それから日常雑貨の購入費と考えたほうが、理にかなっている。「生活費や学費のため」にアルバイトを始めたと答えない者は、半数をこえている。この者た

ちは、生活費、学費を文字どおりに考えたからであろう。

このように、高校生がアルバイトをするのは将来のことを考えてするのでもなく、家計を助けるためでもない。彼らは、友達づきあいをうまくするためであり、ほしい高価な持ち物や服装を手に入れるために、アルバイトにはげむのである。

だからであろうか。高校生の中には、たとえ親からもらう小遣いの額が5万円になったとしてもアルバイトをするという者が3割近く(27.8%)もいる。5万円という金額は、高校生が親からもらっている小遣いの10倍である。毎月小遣いを5万円もらうと、アルバイトを「絶対しない」という者は、わずか4人に1人(26.1%)である(表III-7)。

高校生の交際費や消費行動は限りがないのである。十分と思われる5万円をもらっても、彼らの交際費は十分でないし、ほしいものは手に入らない。そして、1度手に入っても、また新しい高価なものがほしくなるようだ。

こうした天井のない交際費と消費行動は、今アルバイトをしている者ほど強い。親から5万円の小遣いをもらったとしても、アルバイトを「絶対する」という者は、今アルバイトをしている者の中で2割弱である。それに「たふんする」を加えると、5割に近い者がアルバイトを続けるという。こうしたアルバイト行動は、男女にかかわらず共通にある。

一方、アルバイトの経験のない者は、5万円の金額でほしいものや交際費がおさまると思うのか、6割の者がアルバイトはしないと答える。

高校生は、友人との交際費と高価なものほしさのためにアルバイトをしているし、これからも続けるようである。

こうしたアルバイト経験は、高校生にどんな効果をもたらすのであろうか。それを調べたのが表III-8であるが、そこでのベスト4

は、次のとおりである。

- 1位……「親しい友人や先輩ができる」 (68.7%)
- 2位……「責任感が強くなる」 (67.5%)
- 3位……「礼儀正しくなる」 (62.7%)
- 4位……「忍耐力がつく」 (59.4%)

「出費が多くなる」(42.9%)とか「授業中いねむりが増える」(42.6%)などの否定的な評価は下位にくる。高校生は全体的にみて、アルバイトの経験を肯定的にみている。

オープンアンサーの中からアルバイト肯定派の意見を拾ってみる。

●私がやったバイトは、とても接客がいきおいがよいファーストフード店だったから、とてもよい勉強になったと思う。いやな客には泣きそうになったりしたけど先輩がとてもやさしくしてくれて、とてもよかった。

表III-6 アルバイトをする理由

	(%)		
	とてもそう	ややそう	そうでない
① 友達づきあいやオシャレのため	63.8	28.6	7.6
② 高価なものを買う	58.2	31.2	10.6
③ いろいろな人と知りあえるから	31.1	48.0	20.9
④ ひまな時間があるから	29.8	49.7	20.5
⑤ 生活費や学費のため	24.9	22.5	52.6
⑥ 部活動よりおもしろい	22.5	36.5	41.0
⑦ 友達がやっているから	21.7	47.7	30.6
⑧ 社会勉強のため	15.1	41.8	43.1
⑨ 将来の職業に役立つ	9.2	33.6	57.2

勉強以外に学ぶことが多かった。

●ぼくはアルバイトをやる前ははっきりいって短気で人との関係も知らず、非常識な人でした。でも今、自分にあう店で働いているので昔よりも常識的になり、社会勉強や自分の性格を調整することもでき、役に立っている。

●高2になってはじめてアルバイトをしたけど、仲間はみんないい人ばかりで、仕事は少しキツイけど仲間にはいつもはげまされてがんばっている。もっと早くからすればよかったと思った。いろいろな人と出逢え

て、いろいろなことを学べるチャンスだと思うから。

●親の許可があってやっている今のバイトでは店長や他の人に親切にしてもらって、たよりにされてすごく楽しい。自分に自信がもてるようになるし、責任がもてるようになるのだから、バイトはやってよい。

高校生のオープンアンサーの中から、アンケート結果を支持する声を拾うのは簡単である。生の声でもアルバイトを肯定的にみている。

ところで、こうしたアルバイトの効用に対

表III-7 小遣い5万円もらったとしてもアルバイトをするか(アルバイト経験別)

(%)

		絶対する	たぶんする	たぶんしない	絶対しない	わからない
全 体		8.8	19.0	28.5	26.1	17.6
アルバイトをしている		16.7	29.5	20.4	18.2	15.2
アルバイトをしていない		6.7	15.5	31.6	29.4	16.8
男 子		10.6	17.0	25.9	28.3	18.2
女 子		6.9	20.9	31.1	24.0	17.1
男 子	アルバイト中	22.3	26.7	16.0	20.0	15.0
	アルバイト経験あり	8.1	14.1	31.0	29.9	16.9
	アルバイト経験なし	4.4	12.6	27.8	33.3	21.9
女 子	アルバイト中	12.3	31.8	23.4	17.0	15.5
	アルバイト経験あり	5.4	17.9	34.3	28.1	14.3
	アルバイト経験なし	3.2	13.0	35.3	27.4	21.1

する意見は、アルバイト経験の有無によってどう変わるのであろうか。それを調べたのが図Ⅲ-1である。図は、アルバイト経験の有無と男女別に分けて示してある。

図から大きく分けて3つのことが指摘できる。1つは、「親しい友人や先輩ができる」という項目である。ここでは、アルバイト経験の有無によって差がみられない。アルバイトを今している者、今はやめている者、そして経験のない者も、ともに肯定的に評価する。人間関係の広がりでは、アルバイトを経験しない者も、効用を認めるようである。

2つ目は、アルバイト経験者が高く評価する項目である。それは「体力がつく」や「礼

儀正しくなる」である。これらは、男女ともにアルバイトを今している者が、その効用を認める。

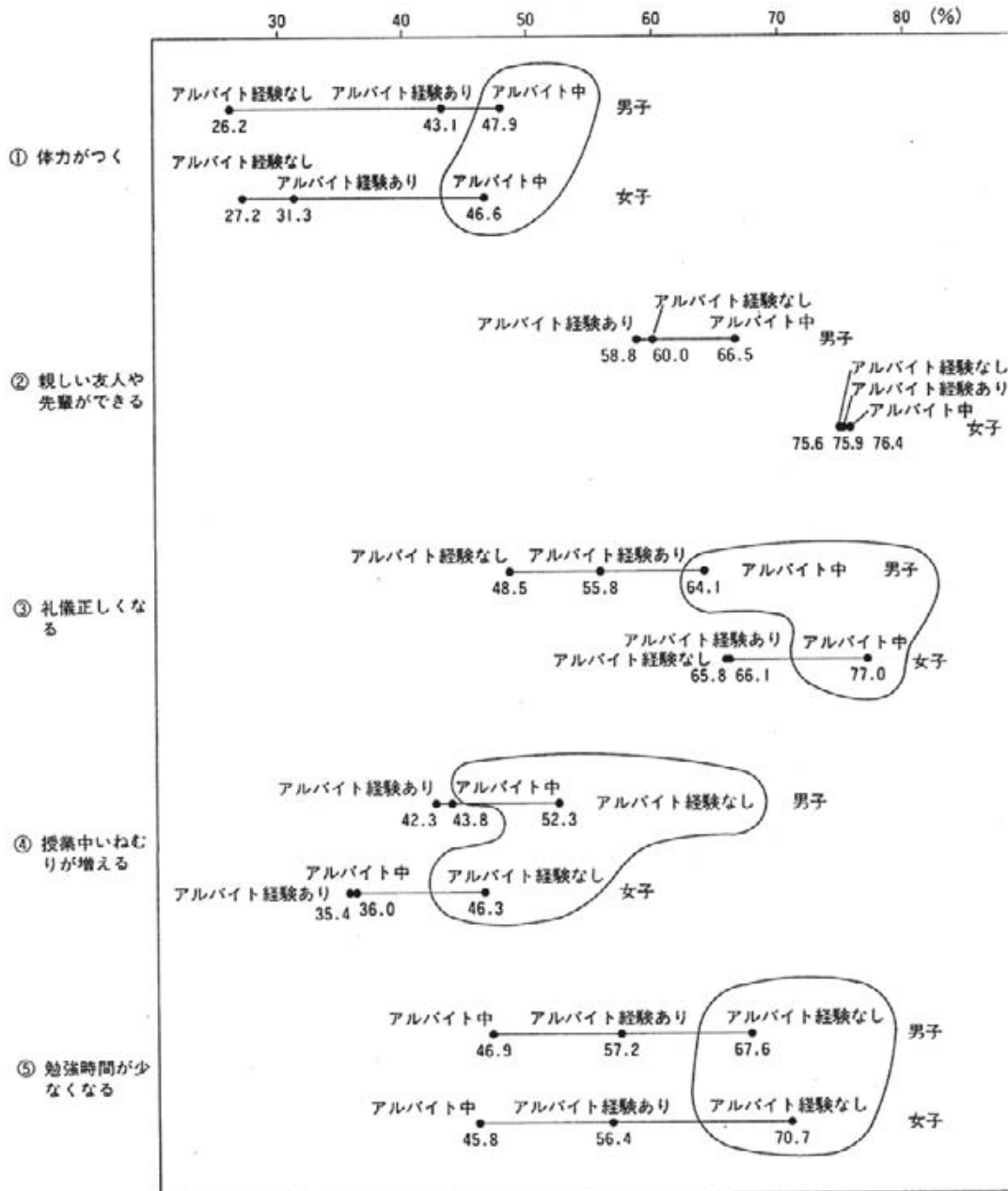
3つ目は、アルバイトを経験しない者が高く評価する項目である。それは「授業中いねむりが増える」や「勉強時間が少なくなる」である。これらは、ともにアルバイトによるマイナスな結果である。

こうした高校生のアルバイトの効用観から人間関係の広がりとは別として、経験者はアルバイトのプラス面を、未経験者はマイナス面に力点を置く、といえる。つまり、自分の立場を正当化しているようだ。

表Ⅲ-8 アルバイトをするとどうなるか

	(%)			
	とても そう思う	かなり そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
① 親しい友人や先輩ができる	26.1	42.6	25.5	5.8
	(68.7)			
② 責任感が強くなる	25.4	42.1	26.0	6.5
	(67.5)			
③ 礼儀正しくなる	25.5	37.2	29.1	8.2
	(62.7)			
④ 忍耐力がつく	21.2	38.2	32.7	7.9
	59.4			
⑤ 勉強時間が少なくなる	24.8	33.1	30.1	12.0
	57.9			
⑥ 協調性が身につく	15.2	38.5	39.0	7.3
	53.7			
⑦ 出費が多くなる	16.0	26.9	43.3	13.8
	42.9			
⑧ 授業中いねむりが増える	19.5	23.1	42.9	14.5
	42.6			
⑨ 体力がつく	12.5	24.2	50.7	12.6
	36.7			

図III-1 アルバイトをするとどうなるか (アルバイト経験別)



3. 高校生はどの活動に楽しみを見いだしているか

中学生の生活は、勉強と部活動の二分野に分けられる。高校になるとこの二分野だけでは説明しきれなくなる。この二分野にもう一つ「アルバイト」をつけ加える必要がある。

表III-9は、高校生の活動場面を「得意な授業」「部活動」、それに「アルバイト」に分け、それぞれにおいて、「楽しい」「将来役に立つ」「自分のよさが発揮できる」「心が落ち着く」について評価してもらった結果である。

楽しい……部活動>アルバイト>得意な授業
将来役に立つ……

得意な授業>アルバイト>部活動
自分のよさが発揮できる……

部活動>アルバイト>得意な授業
心が落ち着く……

部活動>得意な授業>アルバイト

全体的にみると、「部活動」は、必ずしも将来役に立つとは思っていないが、自分のよさを発揮できるので楽しいし、心が落ち着く、とみられている。「得意な授業」は、きっと将来役に立つけれども、自分のよさを発揮できにくいし、楽しくない、とみられている。「アルバイト」は、きわだった特徴はないが、そ

れぞれの機能をもちあわせているようである。

高校生の4割は、現在部活動をやっていない。けれども、高校生は、アルバイトや得意な勉強よりも部活動のほうを高く評価している。

アルバイトの効用はかなりの高校生が認めていた。といて、必ずしもアルバイト礼讃ではない。部活動と比べると、多くの高校生は部活動のほうに軍配をあげるのである。

そうしたことを念頭におき、それぞれ3つの活動は、成績と学校ランクによってその機能をどのように評価されるのだろうか。それを調べたのが図III-2、3である。

まず図III-2の「楽しさ」を検討する。「得意な授業」が楽しいと思うのは、学校ランク上位校と中位校の成績が「上」の者たちである。一方、学校ランク下位校では、楽しさは成績によってあまり変わらない。学校ランクが中位以上においては、授業の楽しさは、生徒の成績に左右されるのである。

また、「部活動」が楽しいと思うのは、なぜか学校ランクの上位校がトップで、次に中位校がくる。下位校はいちばん低いのである。

表III-9 どんな気持ち強いかな

(%)

	得意な授業	部活動	アルバイト
① 楽しい	19.7	44.9	35.4
② 将来役に立つ	46.6	16.5	36.9
③ 自分のよさが発揮できる	25.3	45.7	29.0
④ 心が落ち着く	30.7	45.0	24.3

そして、成績でいえば、成績の「上」よりも「中」の者が、部活動が楽しいと答えている。

この部活動と対照的なのが「アルバイト」である。つまり、学校ランクの下位校がアルバイトに楽しさを見いだしており、次に「中位校」がくる。「上位校」はもっとも低いのである。そして、成績では、「下位校」「中位校」とともに「下」の者が楽しさを見いだしている。

粗くいえば、授業の楽しさは学校ランクよりも学校内での成績に左右される。しかし、部活動とアルバイトの楽しさは、まず学校ランクによって分かれ、その次に学校内での成績の位置によって分かれる。

データは割愛したが、「自分のよさを発揮できる」は、この「楽しさ」とほぼ同じ結果を示している。自分のよさを発揮できるから楽しいといえるであろうから、同じ結果がでて当然だろう。

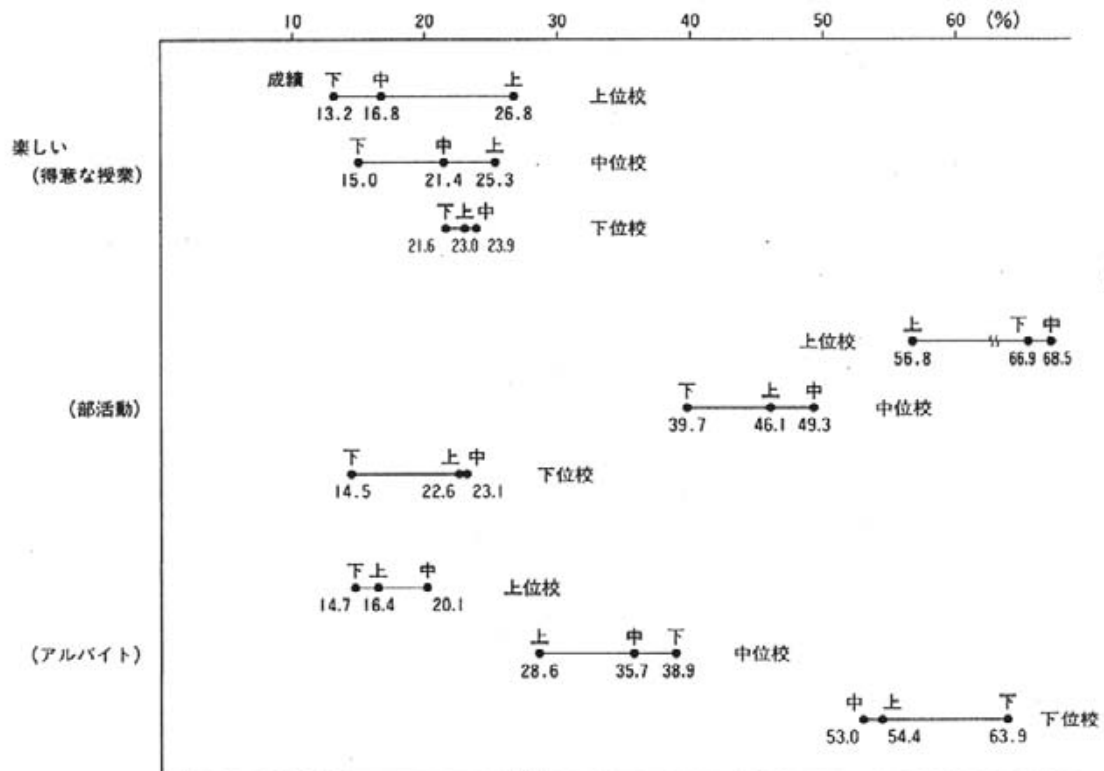
授業の楽しさは学校ランクに左右されることなく学校内の成績によって異なってくるのは、高校へ入学してくる段階で、知的能力別により分けられているからであろう。

それに対して、部活動やアルバイトは入学前に「選別」の洗礼を受けていない。特にアルバイトは高校に入学してはじめて体験する。

学校ランクの上位校は、2年生の1学期まではまだ部活動に没頭できるのであろうか、そこに楽しみを見いだしている。下位校は、部活動はそれほど活発でないのか、そこにも楽しみを見いだせないでいる。下位校の多くの者は、残された「アルバイト」の分野に楽しみを見いださざるを得ない。とりわけ、下位校の成績の「下」の者にとってはそうである。

図III-3は、「将来役に立つ」ことを調べたものであるが、「得意な授業」はやはり、学校

図III-2 楽しい(学校ランク・成績別)



ランクによって左右されるし、成績の位置にも左右される。つまり、学校ランクの「上位校」ほど「授業」の効用を認めるし、成績のよい者ほどそうである。

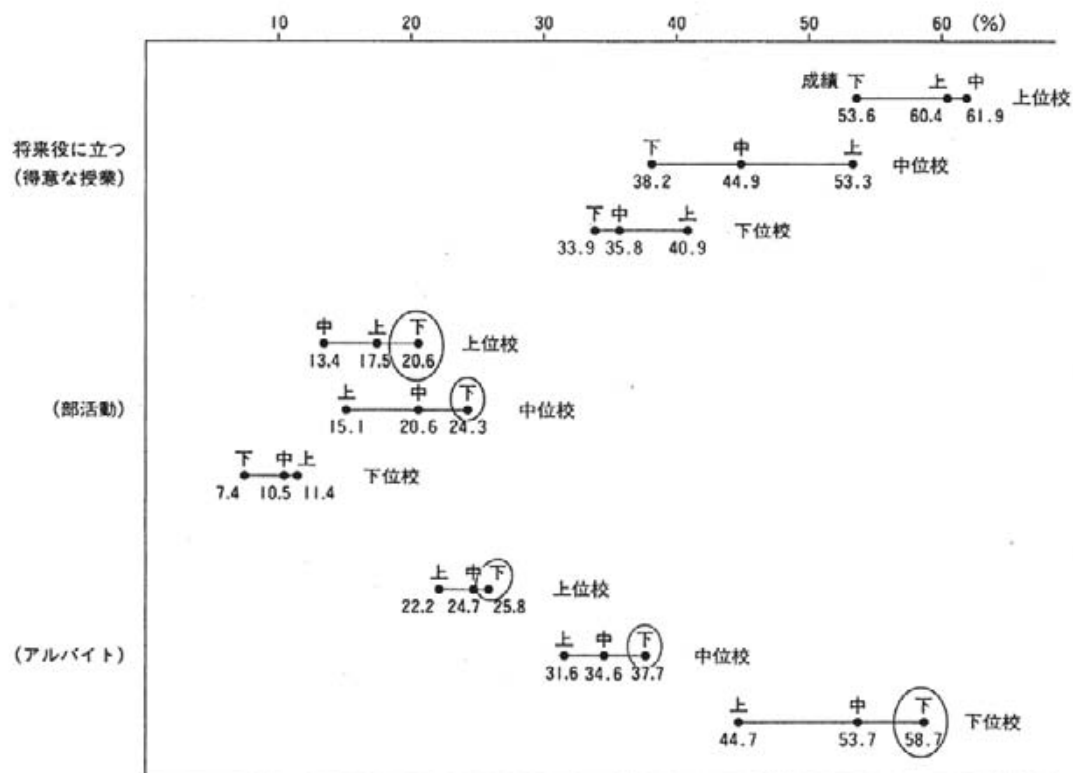
一方、「アルバイト」の効用を認めるのは、学校ランクの「下位校」であるし、成績の低い者たちである。

したがって、これらのデータから次のことがいえそうである。学校ランクの「上位校」の者たちは、「部活動」で自分のよさを発揮でき、楽しさを見いだせるし、「得意な授業」では、それが将来役に立つと期待感を抱いている。学校ランク「下位校」の者たち、なかでも成績の低い者は、部活動の中で自分のよさを発揮できなく、楽しさを見いだせない。そして「授業」が将来役に立つとは思っていない。

い。彼らが楽しみを見いだしているのは「アルバイト」である。しかも、そのアルバイト経験は無駄とっていない。将来なんらかの形で役立つと期待しているのである。この中間にあるのが学校ランク「中位校」であるが、どちらかといえば、スタンスは「上位校」のほうに近い。

したがって、高校2年生の1学期段階では、部活動に自分のよさと楽しみを見いだしている生徒とアルバイトに自分のよさと楽しみを見いだしている生徒の二層に分けられる、といえる。「上位校」の生徒たちにとって、アルバイトは、眼中にない。彼らはアルバイトの効用を認めるものの、アルバイトをしなくても自分が認められ、楽しみを見いだすものがあるのである。

図III-3 将来役に立つか（学校ランク・成績別）



結び

次の文は、ある高校の学校新聞に掲載された校長のアルバイトについての抜粋である。

——アルバイトは望ましい学習活動には決して良い影響を与えない。いかに軽作業のアルバイトであっても長時間に及べば大変な労力を使い、翌日の授業に大きな影響をもつ。疲れから授業中眠くなり、授業への集中が疎くなって、その教科への興味関心をなくし、授業を受けることをさけるようになってゆく。果ては単位修得ができるかどうか覚束なくなる。

そして、「自分で稼いだ金だから、使うのは勝手」の理由から、自分を律する心を忘れ、金使いが荒くなり、金の魅力に取りつかれて、ますますアルバイトにのめり込む。

諸君は自分の意志から、更に高い学校、知識、教養を身につけて立派な人間になろうとして高校へ入学したのである。勉学を第一に考えることは至極当然のことであって、アルバイトをする余裕はないと思う。(中略)——

こうした高校生のアルバイトに対する意見は、学校側としては平均的であると思う。ましてや校長としては、当然の意見かもしれない。しかし、これまで紹介してきたアルバイトの実態や高校生のアルバイト観をみると、すべての高校生に、こうした意見が適用されてよいかどうか、疑問である。

確かに高校生は、友だちとの交際費やオシャレ、それからほしいものを買うためにアルバイトをする。そして、小遣いは増え、キャ

ッシュカードを持つようになり、消費行動はますます伸びる。

しかし、アルバイトを続けると、出費がかさんだり、勉強時間が減るというネガティブな面よりも、友人が増えたり、責任感が強くなり、礼儀正しくなる、というポジティブな面が身につく、という。彼らは、アルバイトによるネガティブな側面を無視しているのではない。それよりもポジティブな面を高く評価しているのである。

当然であるが、アルバイトの効用を認めるのは、現在アルバイトをしている者たちである。そして、アルバイトをしている者は、学校ランクの「下位校」に多い。「下位校」の者の多くは、「授業」というまでもなく、「部活動」にも楽しみを見いだせないでいる。彼らにとって、自分のよさを見いだせ、楽しくて将来を明るくさせるのは、アルバイトなのである。

部活動に楽しみを見いだしている「上位校」の生徒に、アルバイトをしないで勉学と部活動に精を出せ、と説くのはたやすい。しかし勉強と部活動に喜びを見いだせない生徒にとって、冒頭に示した校長の意見は通じないし、酷でもある。

第II章で指摘しているようにアルバイトは多種多様である。そして、高校生も多様化している。それを無視した「アルバイト禁止論」は時代錯誤に近い。生徒一人一人にみあったアルバイト論が必要であろう。もし、そこまですべていなくても、学校ランクの実情に対応したアルバイト指導が求められている。

第IV章 高校生のアルバイトと 学校生活・家庭生活



1. はじめに

高校の部活動は衰退を続けている。歴史クラブ、物理部、新聞部といった地味な文化部のみならず柔道部、剣道部や卓球部、ソフト部といった運動部もクラブ員が集まらず休部や廃部状態に追い込まれている学校が少なくない。その最大の原因は、豊かな社会にあると考えられる。すなわち、近頃の若者は消費活動の中に楽しみを見いだそうとする。高校生もお金を使った遊びや活発な消費活動を通じて自分を主張したがる。そのためにアルバイトが過熱し高校の部活動が衰退する図式がある。

1986年の調査では、「アルバイト経験あり」が40.5%、「長期休み中のアルバイト」が17.8%、「平日」が7.4%であった（『モノグラフ・高校生'87』vol.20「大学へ進学しない生徒た

ち」）。5年後の今回の調査では、「アルバイト経験あり」が65.4%、そのうち「現在もしている」、すなわち学校の授業のある期間もしている生徒が29.6%、さらに、その4人に1人は「週に5日以上」働いている。アルバイトの疲れから朝起きられず連日のように遅刻する者、授業中のいねむり、まったく予習も復習もしてこない、放課後のそうじや臨時ホームルーム、文化祭、体育祭などの学校行事をアルバイトのためにさぼる生徒もでてきた。

この章では、こうしたアルバイトをしている生徒の増加の中で、アルバイトをしている生徒とそうではない生徒の間に、学校生活や家庭生活の面で、どのような差異がみられるかを中心に検討してみたい。

2. 学校生活について

(1) 部活動

今回の調査では58.4%の生徒が自由参加の部活動に属している。「運動部熱心」31.2%、「文化部熱心」9.4%と合わせると約4割が積極的に参加している。これに対して、「以前参加したことがある」17.9%、「参加したことがない」23.7%、合わせて約4割の生徒が部活動を何もしていない。1984年の調査では、「以前参加」が24.7%、「参加したことがなし」が18.0%であった(『モノグラフ・高校生'84』vol.12「高校部活動、いま」)。初めから部活動に参加しない生徒が18.0%から23.7%に増加している。

学校ランクから参加状況をまとめたものが表IV-1である。上位校では男子73.4%、女子77.5%が参加する。運動部や文化部に「熱心に参加」は男子57.8%、女子55.1%、これに対し下位校では男子71.7%、女子67.7%が現在部活動に参加していない。「参加したことがない」は男子43.1%、女子43.0%である。学校ランクと成績面から参加状況をまとめたものが図IV-1である。運動部に熱心に参加

している層は上位校では成績下位の生徒が多く、次いで上位者、中位校では成績に逆比例となる。下位校では成績に比例している。上位校の中位者の低率は、部活動以外に興味関心が分散していたり、逆に学習面からの制約があると思われる。下位校においては成績が下がるにしたがって「熱心に参加」が減少し「参加したことがなし」が増加、下位者では51.3%が部活動に参加したことがない。『モノグラフ・高校生'84』vol.12「高校部活動、いま」によれば、不参加者は行動体験が豊かなわりに学校生活に充足していない。学校に誇りももてない。そして高校生としての自分に自信ももてず自己像までも乏しい生徒が多い。中学時代も約2割の生徒が部に不参加であったが、7割の者が運動部を体験していると分析している。今回の調査でも学校生活で充足できず、クラス集団にもとけこめない者もいる。約6割がときどき「学校を休みたい気持ちになる」と答えている(表IV-2)。

アルバイトと部活動への参加との関連をみたものが図IV-2である。現在アルバイトを

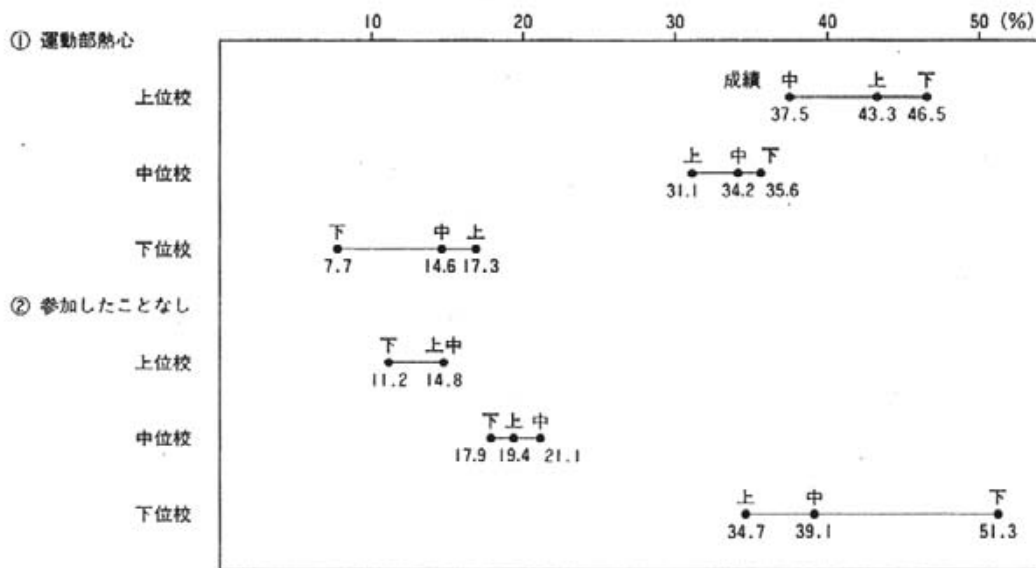
表IV-1 部活動への参加(学校ランク別)

		(%)					
		運動部 熱心	運動部 不熱心	文化部 熱心	文化部 不熱心	以前は 参加	参加した ことがなし
男 子	上位校	50.2	9.5	7.6	6.1	13.0	13.6
	中位校	40.9	10.3	2.9	8.2	16.9	20.8
	下位校	15.6	7.7	2.6	2.4	28.6	43.1
女 子	上位校	34.6	10.9	20.5	11.5	9.6	12.9
	中位校	28.9	5.3	14.7	14.7	18.2	18.2
	下位校	9.2	9.7	4.5	8.9	24.7	43.0

している生徒の部参加率は低い。男子では64.7%、女子では57.0%が部活動に参加していない。また、運動部を熱心にやっている者はアルバイトを現在やっていない者の半分以下である。さらに、部活動に「参加したことなし」の比率は、「アルバイト経験なし」の男

子19.0%、女子15.0%であるのに対し、「現在アルバイトをしている」男子は34.4%、女子は31.3%である。すなわち高校生の平日におけるアルバイトは、学校での部活動に参加しないことの上に成り立つものといえる。

図IV-1 部活動への参加（学校ランク・成績別）



表IV-2 ふだん感じていること（部活動別）

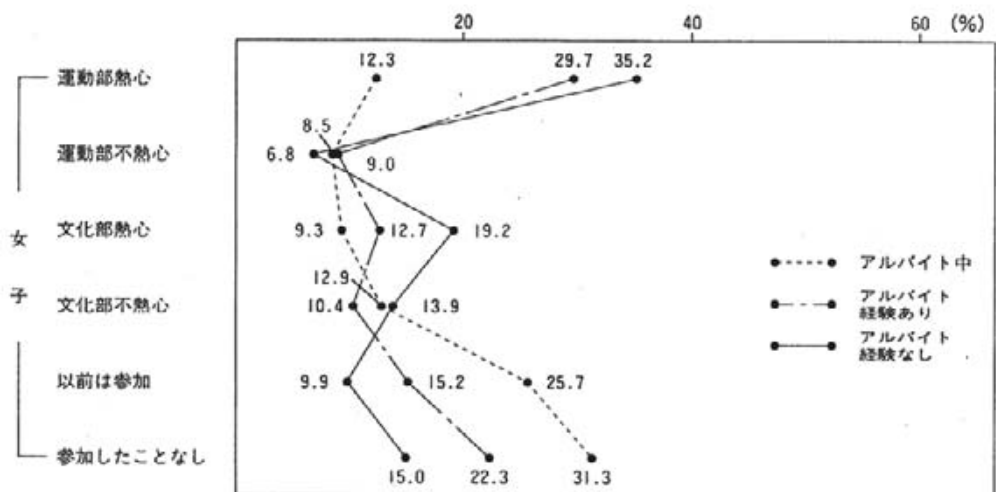
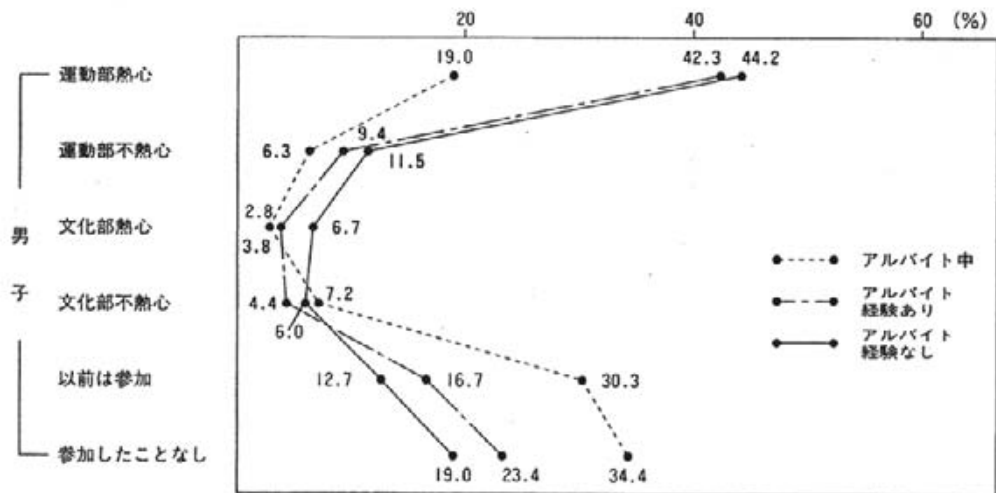
(%)

	運動部 熱心	運動部 不熱心	文化部 熱心	文化部 不熱心	以前は 参加	参加した ことなし
高校生としては しあわせ	62.7	43.0	70.2	46.2	45.4	40.7
学校生活は楽し い	62.3	40.4	64.2	43.1	39.6	33.8
この学校の生徒 として誇り	42.2	22.2	44.6	27.3	24.0	27.0
先生に尊敬を感 じる	24.7	30.7	20.6	25.9	28.6	30.2
はやく社会で働 きたい	27.2	30.0	27.6	31.7	33.0	33.3
学校を休みたい 気持ちになる	40.9	55.0	35.5	47.1	55.7	58.9
毎日が単調でつま らない	48.6	67.8	42.7	63.9	58.3	58.0
自分の今したい ことがわからない	51.5	63.1	46.1	57.7	50.0	52.8
今いるクラスに とけこめない	12.8	10.9	13.1	17.2	16.4	18.0

(「とても思う」+「かなり思う」割合)

○ は最大値

図IV-2 アルバイト経験（部活動別）



(2) ふだん感じていること

単純集計の「とても思う」「かなり思う」の数値を合わせてみると、「高校生としてはしあわせ」と感じている生徒は51.5%、「学校生活は楽しい」が47.3%、その反面、「学校を休みたい気持ちになる」49.5%、「ときどきむやみに腹が立つ」49.8%、「自分が今いちばんしたいことが何なのかよくわからない」52.4%、「毎日が単調でつまらない」55.1%である。

学校ランクからみたものが表IV-3である。上位校は満足度が高く、特に女子の場合、「しあわせである」「学校生活は楽しい」の2項目で7割をこえる。中位校の女子は66.6%が「毎日が単調でつまらない」、60.2%が「自分の今したいことがわからない」と答えている。中位校の女子は男子よりも、しあわせや高校生

活の楽しさといった日常的項目では約10%も肯定的であるのに対し、その内実では自己像に乏しいようである。下位校では、「しあわせ」男子34.7%、女子34.4%、「学校は楽しい」男子27.8%、女子26.8%、「学校を休みたい」男子65.5%、女子64.8%ときわめて満足度が低い。

図IV-3は成績面から、「学校生活は楽しい」と「学校を休みたい気持ちになる」の2項目を検討したものである。上位校の中位者が最も高く73.1%が「学校生活は楽しい」と感じ、また、学校を休みたいと思わない生徒が73.5%を示している。その内訳は、「とても」楽しい20.0%で、同じ上位校下位者22.7%より低い、「かなり」楽しい53.1%で他を圧倒している。いわば、そこそこの楽しさであり、中間層に多くなっている「まあこんなものだろう」的な満足感に思える。逆にそう

表IV-3 ふだん感じていること（性・学校ランク別）

	男 子			女 子		
	上位校	中位校	下位校	上位校	中位校	下位校
高校生としてはしあわせである	64.7	43.2	34.7	73.8	52.1	34.4
学校生活は楽しい	64.5	38.8	27.8	73.2	47.9	26.8
この学校の生徒として誇り	44.2	19.5	13.1	42.8	26.9	17.6
先生に反感を感じる	23.8	33.2	27.2	12.7	30.3	34.2
はやく社会で働きたい	24.6	29.1	36.2	17.8	32.0	43.5
学校を休みたい気持ちになる	34.1	56.1	65.5	30.7	48.5	64.8
毎日が単調でつまらない	48.1	62.6	48.5	40.6	66.6	59.1
自分の今したいことがわからない	50.9	50.5	42.5	55.2	60.2	51.0
ときどきむやみに腹が立つ	47.7	48.2	50.3	42.5	50.2	62.9

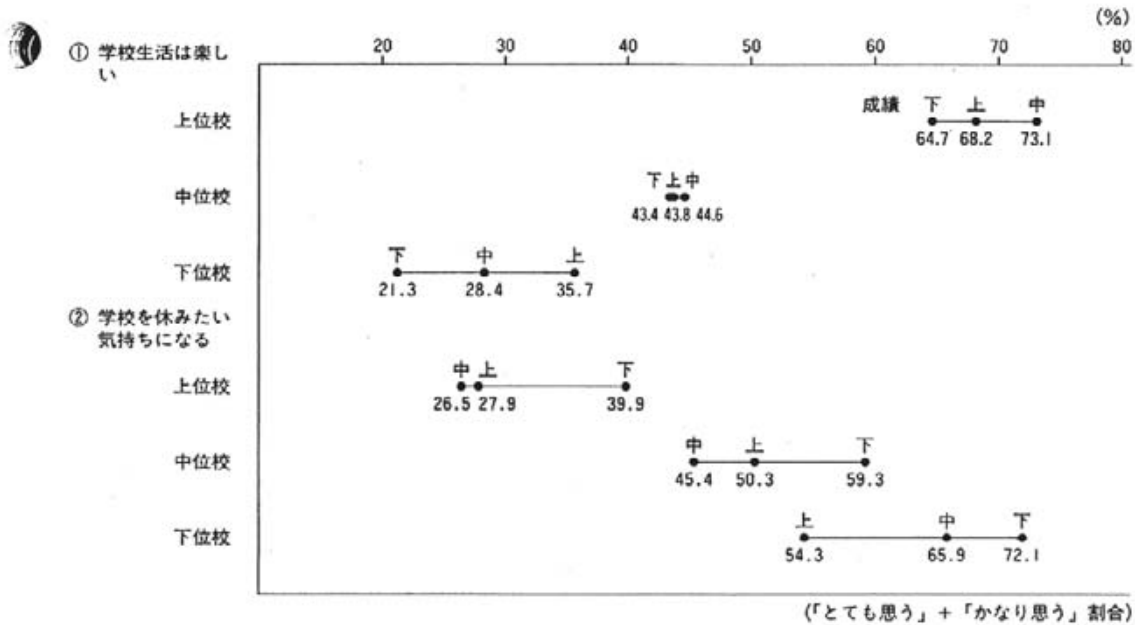
(「とても思う」+「かなり思う」割合)
○は最大値

した満足感と最も遠い所にいるのが下位校の下位者である。「学校生活は楽しい」21.3%と、約8割が学校は楽しくないと感じ、72.1%が「学校を休みたい気持ちになる」と答えている。

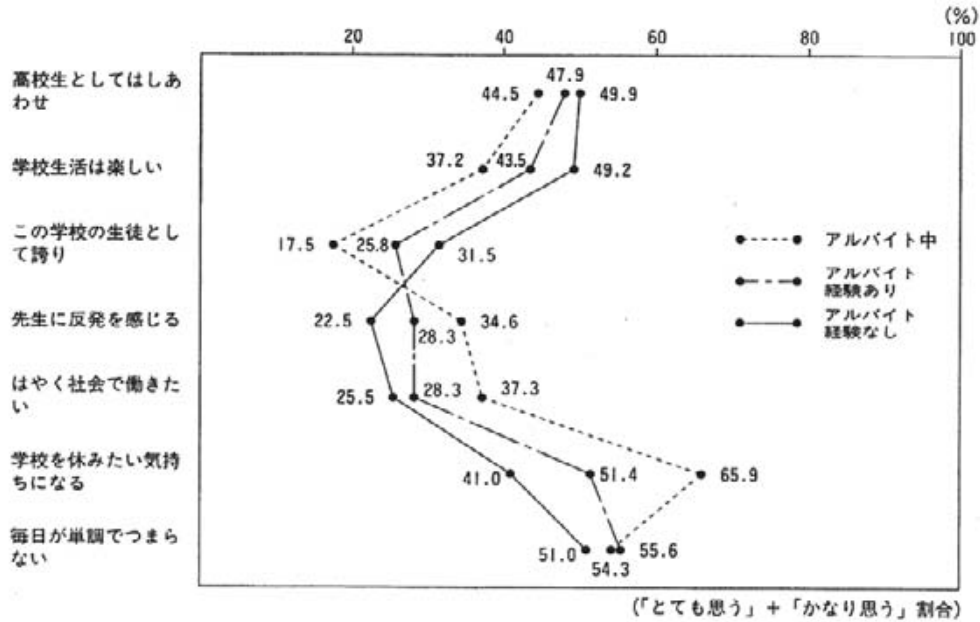
図IV-4、5は、アルバイトをしている生徒がふだん感じていることをまとめたものである。現在アルバイトをしている生徒の学校

生活における満足度は低い。特に女子は男子にくらべ全体の満足度が高いだけに、アルバイトをしている生徒の満足度の低さが相対的に目立つ。部活動など学校の日常生活に積極的になれないからアルバイトに駆り立てられ、アルバイトを平日もやっているからこそ、学校生活にますます不満が生まれてくる悪しき循環があるように思われる。

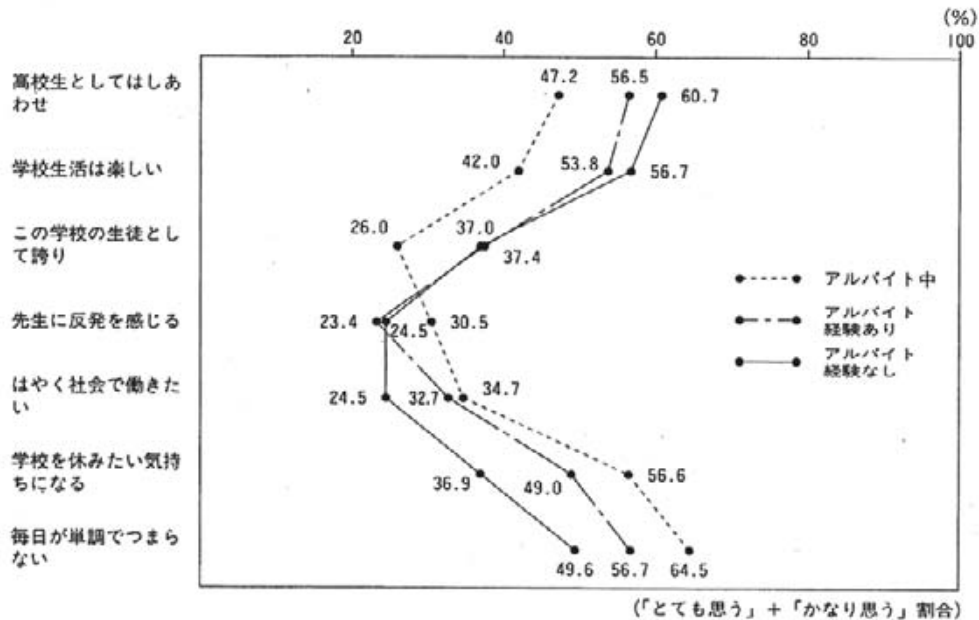
図IV-3 学校適応度（学校ランク・成績別）



図IV-4 ふだん感じていること (男子・アルバイト経験別)



図IV-5 ふだん感じていること (女子・アルバイト経験別)



3. 放課後の生活

(1) 放課後の過ごし方

単純集計によれば、「学校帰りに友達と街をぶらつくのが楽しい」と感じている生徒は57.5%、「家庭での勉強は楽しくない」94.1%、したがって家での勉強は「ほとんどしない」56.4%、テレビを「2時間以上みている」67.9%である。

表IV-4は学校ランクから放課後の過ごし方をまとめたものである。勉強時間については学校ランクに比例する。調査対象が高2で調査時期が1学期中間考査後であることを考慮

しても、「ほとんどしない」の数値の高さが目につく。その属性は成績に比例する(図IV-6)。テレビを「3時間以上みている」上位校男子は、21.4%、女子15.9%、下位校男子57.8%、女子52.6%。上位校女子で「ほとんどみない」9.9%である。「3時間以上みる」生徒の属性をみると、学校ランクに相関する。上位校の場合みるときはみているが、ダラダラといつまでもみることが少ないといえる(図IV-7)。友達と話をする点では、下位校男子の19.5%、すなわち5人に1人は友達とほとんど話をしていない。上位校の男子では「30

表IV-4 放課後の生活時間(性・学校ランク別)

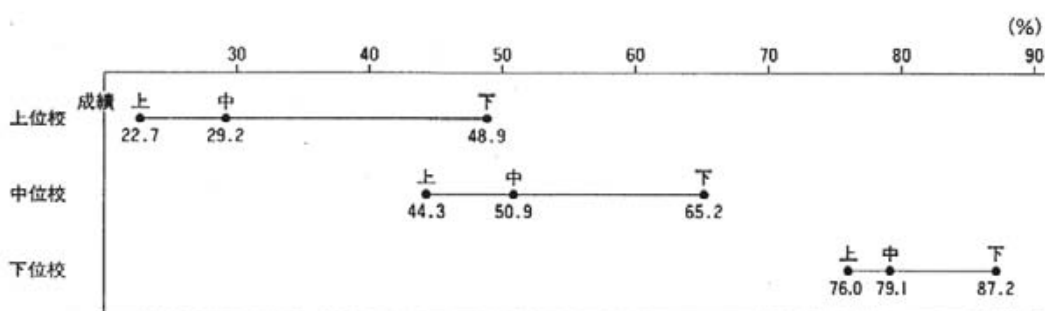
		男 子			女 子		
		上位校	中位校	下位校	上位校	中位校	下位校
勉強時間	ほとんどしない	34.3	59.5	80.1	36.9	50.8	83.8
	30分～1時間	42.2	30.2	14.4	40.5	38.8	13.0
	2時間	17.6	7.1	3.3	17.0	8.9	1.7
	3時間以上	5.9	3.2	2.2	5.6	1.5	1.5
テレビ	ほとんどみない	6.5	4.3	5.6	9.9	5.5	5.1
	30分～1時間	35.1	27.3	12.7	42.7	21.9	14.9
	2時間	37.0	32.0	23.9	31.5	39.7	27.4
	3時間以上	21.4	36.4	57.8	15.9	32.9	52.6
友達と話を する	ほとんどしない	13.0	17.2	19.5	10.9	8.1	9.6
	30分～1時間	64.5	56.7	38.3	53.2	52.0	36.3
	2時間	13.4	14.2	16.0	19.2	20.8	22.1
	3時間以上	9.1	11.9	26.2	16.7	19.1	32.0

分から1時間」が64.6%と最も多いのに対し、下位校女子では「2時間以上」54.0%と、いつまでもしゃべっている傾向がある。とりわけ下位成績者にあてはまる（図IV-8）。

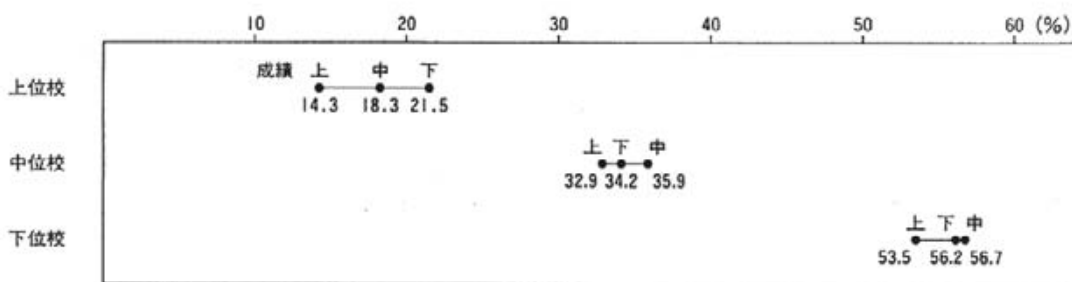
アルバイトをしている生徒の放課後の過ごし方をみると、テレビをみる時間ではアルバイトをしていない生徒との間に目立った差異はない。しかし、家での勉強時間では明らかな差があらわれている（図IV-9）。男子74.3%、女子68.3%が「ほとんどしない」の対

し、アルバイト経験のない者で「ほとんどしない」者は男子41.5%、女子42.7%である。アルバイトをすることによって家庭勉強が犠牲にされている。友達と話す時間はアルバイトをしている生徒のほうが多い（図IV-10）。特に男子の場合、時間が長くなる。これはアルバイトをする生徒の属性の1つともいえるが、アルバイトをすることが話をする機会や話題が増えることにも起因していると思われる。

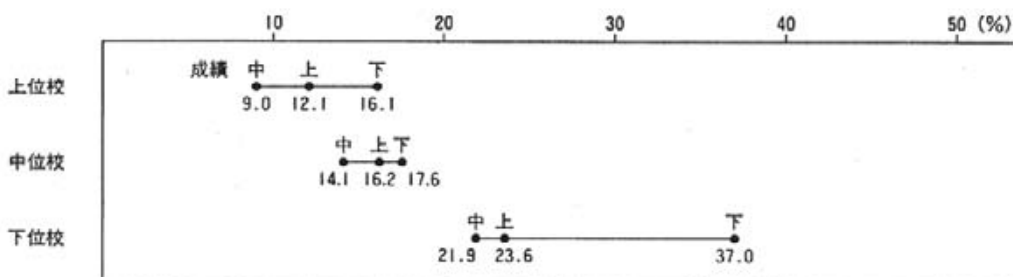
図IV-6 家でほとんど勉強しない生徒の割合（学校ランク・成績別）



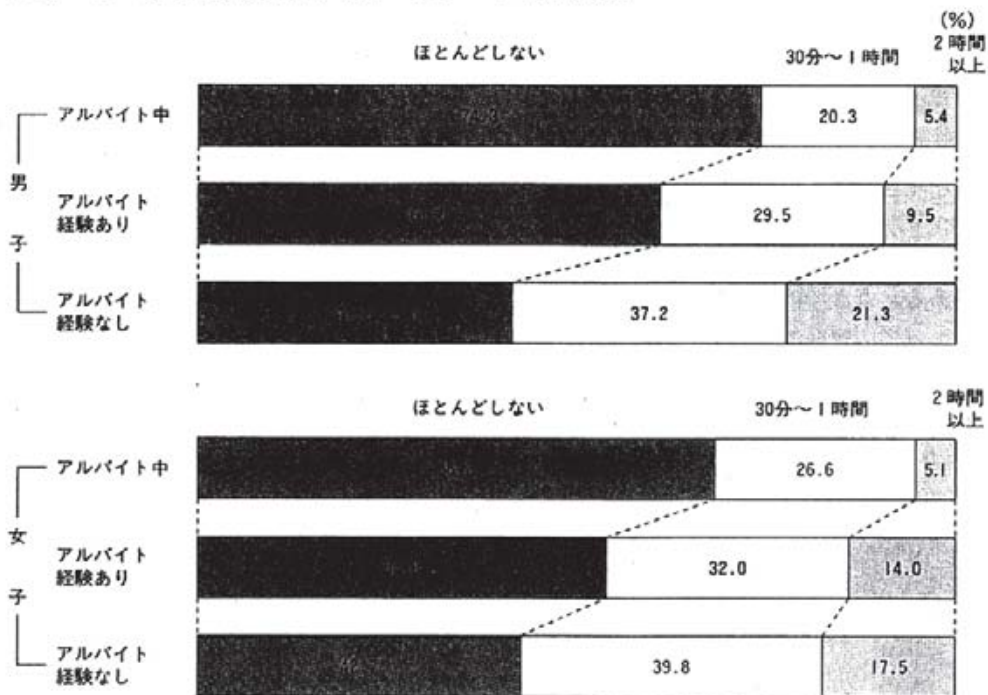
図IV-7 テレビを3時間以上みる生徒の割合（学校ランク・成績別）



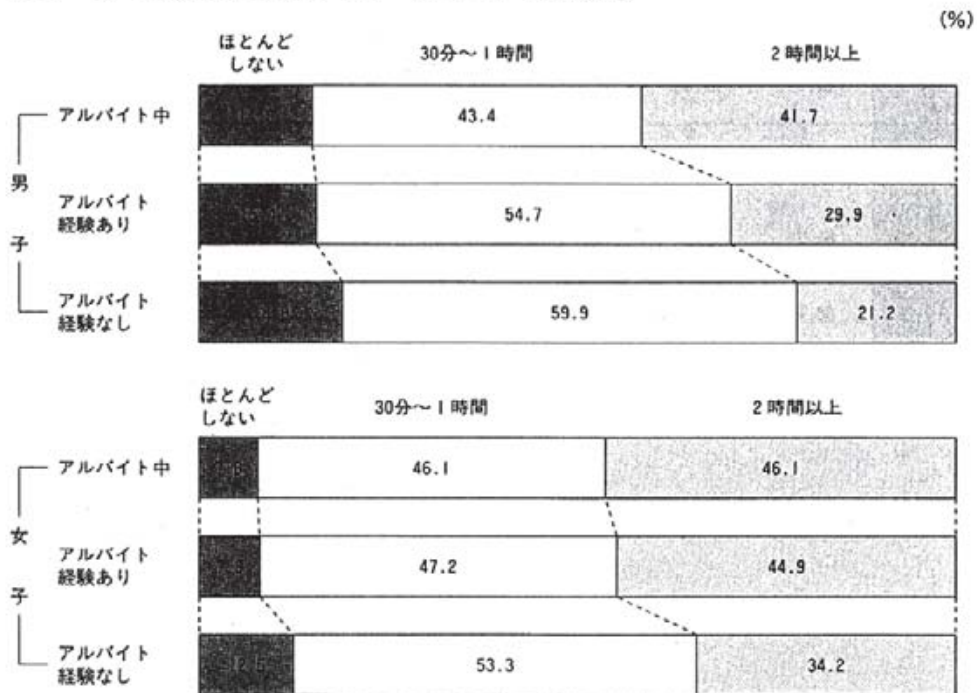
図IV-8 友達と3時間以上話す生徒の割合（学校ランク・成績別）



図IV-9 家での勉強時間（性・アルバイト経験別）



図IV-10 友達と話す時間（性・アルバイト経験別）



(2) 高校生の持ち物

大衆消費社会といわれる今日、高校生も活発に消費活動をし、さまざまな物を所持している。教室の机の上に出された文具だけみても、多種多様なデザイン、型のもがあり、皆が持っているから自分も持っているというものもあれば、自分しか持っていないというものもある。ここでは、成績やアルバイトの有無によって、家庭で所持するものにどのよ

うな特徴があるか検討してみる。

表IV-5は成績面からまとめたものである。成績のよい者ほど多く持っているのは、ギターなどの楽器類と文庫本20冊以上の2項目である。楽器の中にはピアノなども含まれていると考えられる。これに対し下位の成績者ほど所持率の高いものは、自分専用テレビ、オートバイである。音楽CD10枚以上の所持率も中位校から下位校にかけて高い傾向がある。自分専用テレビの所持率が成績に反比例して

表IV-5 高校生の持ち物（学校ランク・成績別）

学校 ランク	成績	学校 ランク	ヘッドフォ ンステレオ	自分専用 テレビ	ギターなど 楽器	オートバイ	スキー	音楽CD 10枚以上	文庫本 20冊以上
上位校	上	88.1	60.0	22.5	51.3	9.6	10.8	50.3	60.4
	中	89.7	62.2	22.5	44.8	6.2	10.7	46.7	55.0
	下	90.1	62.4	25.0	52.4	10.7	11.1	50.7	54.0
中位校	上	87.4	56.6	40.9	38.6	7.8	9.7	60.4	47.6
	中	88.0	62.3	40.4	39.2	6.2	6.6	57.1	39.8
	下	84.7	68.8	50.0	38.7	13.0	10.3	62.8	37.3
下位校	上	85.7	68.4	55.5	29.0	13.1	6.8	61.9	27.1
	中	88.0	63.2	57.3	23.0	13.2	10.5	64.9	24.9
	下	88.7	63.7	60.5	28.2	23.0	6.0	61.9	19.9

(%)

増えるのは、前述の家でのテレビをみる時間と相関する。家で長時間みているテレビは家族といっしょにみるのではなく、自分の部屋で1人でみる生徒が多い。

表IV-6はアルバイトの有無からまとめたものである。現在アルバイトをしている生徒は、他の生徒より総じて所持率が高く物持ちである。男子では自分専用テレビ、オートバイの所持率が他の生徒に比べて著しく多く、女子ではヘッドフォンステレオ、音楽CDにその

傾向がみられる。すなわち、男子の場合、そのアルバイトの目的の1つにオートバイの購入があり、女子ではヘッドフォンステレオやCDのような身のまわりの小物を購入することがあると考えられる。一方、文庫本20冊以上の所持率ではアルバイトをしている者が最も低い。アルバイトをすることによって身のまわりに物を増やすことはできるが、読書をする時間のゆとりを失っている姿がある。

表IV-6 高校生の持ち物（性・アルバイト経験別）

(%)

	男 子			女 子		
	アルバイト 中	アルバイト 経験あり	アルバイト 経験なし	アルバイト 中	アルバイト 経験あり	アルバイト 経験なし
ランカセ	86.8	85.9	80.7	92.7	90.9	91.4
ヘッドフォンステレオ	72.1	72.9	64.9	60.6	57.5	50.3
自分専用テレビ	62.6	56.2	43.6	36.1	28.2	21.2
ギターなど楽器	36.3	33.9	30.5	39.6	46.0	45.1
オートバイ	35.4	17.0	3.7	9.4	3.5	1.7
スキー	12.8	9.7	6.1	8.9	7.2	9.9
音楽CD10枚以上	65.7	65.4	55.0	55.6	54.1	46.6
文庫本20冊以上	25.5	34.8	33.4	42.6	51.2	55.1

4. 学校の指導のあり方

表IV-7は高校生が自分の通う学校の指導の特徴がどのようなものとみているかを、学校ランク別にみたものである。上位校の生徒は「受験指導に熱心」「クラブ活動に熱心」「行事が盛ん」な学校を自分たちの通う学校の特徴ととらえている。中位校の生徒は「就職指導に熱心」「クラブ活動に熱心」「生活指導に熱心」な学校とする。下位校の生徒は受験やクラブ活動、行事の指導には熱心ではなく、「就職指導」と「生活指導」とが熱心な学校としている。

次に学校の指導と生徒のアルバイト率との関係をみたものが表IV-8である。生徒の意識を通しての結果であるが、学校が「受験指導に熱心」「クラブ活動に熱心」「行事が盛ん」であると生徒がアルバイトをする率が減少することがわかる。別の言い方をすれば、学校の場で自分を生かしている生徒は、受験やクラブに対する学校の指導姿勢をそれなりに評価している。逆に、生活指導に熱心と生徒に受けとられている学校では生徒のアルバイト率が高まるという皮肉な結果が生まれている。このことは原因・結果関係が逆で、隠れてアルバイトをする生徒が多く悪影響が出ているから生活指導がきびしくならざるを得ないともいえる。

ほとんどの高校がアルバイトを禁止しているにもかかわらず、高校生のアルバイトは増加の一途にある。アルバイトをしている生徒のなかには学校生活と両立させ、アルバイトを貴重な社会体験として生かしている者もいるが、多くの生徒は両立できていない。とりわけ日常的にアルバイトをやっている生徒の中には、肉体的精神的疲れから勉強意欲を失い高校中退の引き金となっている例もみられる。また、アルバイトを通じて知ったおとなの自由な価値観や生活感覚をそのまま学校生活に持ち込み、遊び感覚や損得勘定だけで行動しようとして不適応をおこす者もいる。

こうした状況に対し、単にアルバイトを禁止するだけではなく、学校として何らかの指導をする時期になったといえる。とって、学校がどこまでアルバイト指導に関与するかは考えどころである。学校外の問題であり本来、本人と保護者の問題であるからだ。したがって学校では、受験だけではなしにより広い進路指導を通じ学校生活に目的をもたせることであり、日常のクラブ活動や学校行事などを通じて生徒一人一人を学校生活の中で生き生きとさせる指導が改めて大切になる。

表IV-7 学校の指導の特色（学校ランク別）

(%)

	76.4	56.7	22.7
	7.6	59.7	61.1
	66.3	71.2	22.7
	15.3	60.7	63.3
	76.4	50.5	35.5

(「とてもそうである」+「まあそうである」割合)

表IV-8 学校の指導の特色（性・アルバイト経験別）

(%)

		学校指導 に熱心	クラブ活動 に熱心	就業指導 に熱心	生活指導 に熱心	その他
男子	アルバイト中	18.9	23.1	30.3	36.0	24.2
	アルバイト経験あり	36.0	36.6	37.3	37.8	38.8
	アルバイト経験なし	45.1	40.3	32.4	26.2	37.0
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
女子	アルバイト中	24.1	24.6	36.0	38.5	25.5
	アルバイト経験あり	35.1	29.8	27.3	32.5	36.8
	アルバイト経験なし	40.8	45.6	36.7	29.0	37.7
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(「とてもそうである」割合)